
5月の普及活動状況

ダイジェスト版

～県下 10 農林事務所農業普及課と農業経営課技術支援係の取組～



岐阜県農政部農業経営課

5月の普及活動状況ダイジェスト版

活力ある新産地づくり

西濃農林 ■ブロッコリー 栽培反省会開催

平成23年度の西濃地域のブロッコリーの実績は、販売金額3,643万円（対前年比133%）出荷量29,623ケース（対前年比133%）、と大きく伸びたが、市場から求められた12月下旬から1月の需要に応じた出荷ができなかった。

そのため、農業普及課では、JA西美濃ブロッコリー生産協議会安八部会、大垣部会で開催された反省会等で、23年度の反省を踏まえながら、24年度の年明け出荷対策として、追肥や防除、新品種の導入などを提案し、育苗管理の支援についても説明した。

可茂農林 ■青ねぎ 産地の拡大に向け、部会外の青ねぎ農家巡回

管内では、加工用青ねぎを生産する農業生産法人が1法人あり、現状では坂祝町青ねぎ部会と連携はしていないもののJAを経由した契約販売により年間を通じた安定生産を目指している。

そのため、農業普及課では、農業生産法人のほ場をJA担当者とともに巡回し、「活力ある新産地づくり支援事業」で実施した同部会での実証結果など、安定生産につながる情報提供を行った。



【青ネギほ場の様子】

恵那農林 ■くり ぼろたんの生産から加工・販売までの活動計画の策定を支援！

「東美濃ぼろたん研究会」（事務局：恵那農林事務所農業普及課）では、「栗品種：ぼろたん」の生産から加工・販売までの課題解決に取り組んでいる。

5月8日に今年度第1回（通算、第6回）の同研究会企画チーム会議が開催され、農業普及課は4年間の活動の整理と今年度の活動計画の策定に向けての支援を行った。

今年度「ぼろたん」は、管内から800kgの出荷を見込んでおり、ぎふ清流国体の食材提供や県農業フェスティバルなどのイベントでの販売を通してPRしていくこととしている。

また、5年先の「ぼろたん」の進むべき方向について検討していくことを生産者及び関係機関で確認した。



【ぼろたん研究会開催風景】

売れる農畜産物づくり

揖斐農林 ■ヨモギ 優良系統の選抜に向けて～試験ほ場で摘み取り～

揖斐川町では、伊吹の薬草文化を活用したヨモギのブランド化を進めている。

他産地との差別化を図るためには、優良系統の確保や栽培技術の向上により、高品質かつ収量の確保が必要である。そこで農業普及課では、5月10日にNPO法人山菜の里いび及び県産業技術センターと連携し、品種試験ほ場で5系統×7種類、35区画で摘み取りを行った。

今後、機能性成分や収量などを分析し、優良系統を選抜することとしている。



【ヨモギの摘み取りと検討】

中濃農林 ■仙寿菜 出荷期間の拡大

中濃地域における仙寿菜の長期安定生産体系を確立するため、農業普及課では、被覆資材による作期拡大の実証を行っている。

雨よけハウスの中でトンネル被覆を行ったところ、通常6月からの出荷が5月中旬から始めることができた。今後さらに出荷期間の延長を目指し、秋にも同様の実証を実施する予定である。



【収穫時期を迎えた仙寿菜】

郡上農林 ■夏だいこん 抽苔・害虫対策徹底による安定生産

郡上市高鷲地域では、夏だいこんの播種が4月16日から始まった（ほぼ平年並み）。昨年は、春先の低温で抽苔が多発したため、本年は、農業者等へトンネルとべたがけ資材による保温の徹底を促した

一方、重要害虫の「キスジノミハムシ」については、農業普及課の5月からの発生消長調査では、例年になく早い発生が確認された。この状況をメルマガ等で農業者等に情報提供し、薬剤防除の徹底を促した。現在、農業者は、定期的な防除に努めている。

近年、夏場に高温が続いており、今後も「キスジノミハムシ」等害虫の多発が懸念される。農業普及課は、迅速かつ正確な情報提供を行い、だいこんの安定生産につなげていく。



【防除作業中の生産者】

飛騨農林 ■飛騨トマト さらに単収1t増を目指して

今年の5月は気温の上下変動が激しく、農業普及課では、メルマガや栽培資料を通じ、温度管理の徹底、老化苗になった場合の対策の指導を行った。

また、トマトの単収向上には、圃場準備も重要な作業であるため、通路灌水の準備や土壌鎮圧等による水分確保、通路灌水の換気対策の準備等、この時期にしかできない作業の徹底を行った。



【水封マルチを利用した苗の保温対策】

農業経営課技術支援係 ■夏秋ナス 夏秋ナス袋栽培の現地実証推進会議を開催

夏秋ナスの袋栽培技術は、実用技術開発事業（3カ年）として、平成22年度から中山間農業研究所中津川支所で研究開発が始まった。事業の最終年度である今年度は、県下で栽培実証を行い技術確立と普及推進を図ることとしている。

現地実証を円滑に推進するため、5月2日に関係農林事務所農業普及課、農業経営課、農産園芸課、中山間農業研究所、同中津川支所で会議を開き、調査項目や方法、検討会の開催計画等について協議を行った。

午後からは、可児市の実証ほ場で、進捗状況の確認と、指導・支援を図る上での注意事項について指導を行った。



【現地で検討する様子】

戦略的な流通・販売

岐阜農林 ■いちご ぎふいちご美人プロジェクトスタート

岐阜地域では、JAぎふ岐阜市いちご部会が中心となって「ぎふいちごパウダー」を活用した菓子づくりなど商品開発に取り組んでいる。

当該パウダーの利用を拡大するため、パウダー加工会社とJAぎふ岐阜市いちご部会、NPO法人子育て支援会が連携し、「ぎふいちご美人プロジェクト」を今年度立ち上げ、化粧品の開発を始めた。農業普及課では、各協力団体が連携出来るようコーディネート活動を行った。



【ぎふ美人プロジェクト検討会】

多様な担い手の育成・確保

下呂農林 ■新規就農者育成 新規ほうれんそう栽培者、出だし順調

今年から「夏ほうれんそう」の新たな仲間として今井慎太郎さんが新規に就農し、現在収穫が順調に進んでいる。3月下旬に播種を始め4月下旬から随時収穫されている。これまでには大きな問題も無く、収量、品質も概ね計画どおりである。

農業普及課では、下呂市、JA等関係機関と連携して、研修段階から支援を行ってきた。今後も、経営安定をめざして継続的に支援をしていく。



【普及指導員による栽培指導】

魅力ある農村づくり

東濃農林 ■直売所「きなあた瑞浪」 安全な野菜出荷体制づくり支援

瑞浪市に農産物直売所「きなあた瑞浪」が6月20日にオープンする。オープンに向け、きなあた瑞浪出荷者協議会の設立（会員171名、H24.5現在）やプレ直売等の準備が進められてきたが、年間を通じた出荷量の確保や農薬の適正使用など安全な野菜出荷体制づくりが課題となっている。

また、「きなあた瑞浪」ではPOSシステムが運用されるが、農業普及課ではJAとうと・出荷者協議会と連携しながらPOSシステムの栽培履歴等の整備について支援している。今後も出荷作物を網羅できるよう随時整備をすすめていく計画である。

また、出荷者協議会では、出荷量の確保・技術向上のため、今年度から地区野菜懇談会の開催を計画している。初回として5月22日～30日、5地区で開催され、約80名が参加した。農業普及課では、夏野菜の栽培・農薬の適正使用についての研修、モデル生産者のほ場視察等について支援した。



【地区野菜懇談会での説明】